

もくじ 勝海舟の扁額と足立 1P 近松松次郎の資料 1P 近松松次郎表彰碑の翻刻 3P  
お知らせ〈600号記念・惜別 安藤義雄さん〉 3P 企画展谷文晁と二人の文一 4P

# 足立史談

第600号

2018年2月15日

足立区教育委員会  
足立史談編集局

足立区立郷土博物館内

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(29-308)

## 小特集 勝海舟の扁額と足立



幕末明治の立役者の一人、勝海舟の書が足立区の二つの小学校に伝来しています。昨年一月、教育委員会と地域文化課文化財係によって修復が行われ、今年の六月～七月期に本墨蹟扁額を含めた幕末明治の名筆を集めた展覧会を郷土博物館で開催する予定です。そこで、二つの作品について小特集でお届けします。(郷土博物館)



勝海舟(一八二三～九九)は開明的な幕府旗本で戊辰戦争のときには徳川家の軍事総裁でした。明治以降は明治政府で海軍卿なども務めました。が、政府と距離をおきました。

幕末三舟」と称されています。岡鉄舟、高橋泥舟とともに「幕末三舟」と称されています。

幕末三舟」と称されています。岡鉄舟、高橋泥舟とともに「幕末三舟」と称されています。



両校の扁額は幕臣時代の「安房守」からとり明治時代に用いた「安芳」の名に雅号に海舟を付し「海舟勝安芳」としています。(2頁につづく)

▲勝海舟(写真・パブリックドメイン)と扁額「近松小学」(西新井小・上段)と「梅島小学校」(梅島小・右)

①近松小学 現西新井第一小学校

北側にあった明治初期の公立学校です。明治十三(一八八〇)年に設立されました。名称は土地の寄贈者の近松松次郎にちなみます。明治二二(一八九九)年に西新井村が成立したとき本尋常小学校西新井分教場となり、大正十二(一九二三)年に西新井小学校が新設開校され場所も現在地に移り、近松松次郎の顕彰碑が建立されました。なお松次郎は元幕臣で海舟に揮毫を頼んだ期日が判明しています(「海舟日記」明治十三年三月二十一日条)。

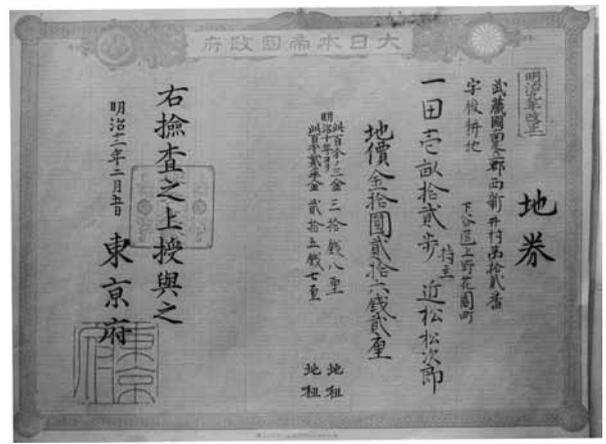
### 小特集 寄稿①

### 近松松次郎の資料

矢沢幸一朗

昨年、「足立の学童疎開を語る会」会長の木嶋孝行さんの実家に遺された明治時代の「地券証」を拝見させていただきました(次頁写真)。近松の土地を木嶋さんが譲り受けたという地券証がありました。その地券に「西新井村第拾貳番字後耕地」「近松の住所が「下谷区上野花園町持主近松松次郎……明治十二年」とあります。

裏面の書き込みは「同村(西新井村)木島安太郎・書ノ地所自今右記名者所有タルヲ確認ス明治十三年三月主事……」とあります。近松松次郎の地所が、近松家から木島家にも移ったことが判りました。西新井小



学校の前身、「近松学校」を寄付した頃、地券には明治十一(一八七九)年に上野花園町に居住と記されています。近松小学設立のうごきは同年頃からとされていますので、近松家が近松小学への土地建物の寄附や、木鳥家への売却を契機に、上野花園町に移転したと理解するべきでしょうか。そうすると西新井に住んだ時期はいつからか、また転出はいつなのかを知りたくりますが、なぞのままです。

なお、同様な地券が六枚も木嶋方に遺されています。また近松小学の拡張が行われた明治二四(一八九一)年には木鳥安太郎さんはかなりの寄付をしたという感謝状もありました。

いまから十年前「足立風土記稿」の調査編纂のおり(平成一〇・一九九八年)に、上野東照宮から池之端へ降りる石段の下に結界の橋があり、そのひっくり返った親柱に「近松松治」と読める文字がありました(拓本 左)。近松松次郎の「次」と異なりませんが近松家は、上野東照宮の造営も担っており、何らかの関係があると思われます。



(足立史談会役員)

小特集 寄稿②

近松松次郎表彰碑の翻刻

木嶋孝行

西新井小学校にある近松松次郎の顕彰碑は、これまでも足立風土記資料『記念碑等』(平成4年、足立区教育委員会)で紹介されています。ただ同書では碑の表面の文章のみで、裏面が紹介されていませんので、あらためて翻刻して紹介します。

【翻刻】

(表面)

表彰碑

明治五年学制頒布ノ時ニ當リ近松松次郎氏ハ兒童教育ノ為ニトテ自己所有ノ西新井八百五十一番地二百一十一坪ノ敷地ト四十坪ノ家屋トヲ當時ノ西新井村ニ寄附セラレタリ。村ニ於テハ之ヲ近松小學校ト稱シテ兒童ヲ収容シタリ。然ルニ明治二十二年町村制施行ノ際、本木、興野、西新井ノ三村合併シテ現在ノ西新井村トナルヤ、近松小學校ハコレヲ本木小學校分教場ト改稱シタリ。爾來人口ノ増加ニ伴ヒ校舎増設ノ必要ニ迫ラレ現在ノ地ニ當分教場ヲ新設シ、大正十二年四月三日移轉開校スルニ及ビ、止ムヲ得ズ近松氏ノ寄附セラレタル旧分教場ノ敷地並ニ校舎ヲ賣却シテ之レガ建設ノ費ニ充ツルニ至リ。茲ニ同氏ヲ教育篤志者トシテ表彰建碑ノ所以ヲ略記ス。

大正十三年十月十一日建之

(裏面・一段目)

- 西新井村長 宝田文次郎
- 助役建設委員 小宮権之助
- 村會議員 木鳥安太郎
- 建設委員 国井勇次郎
- 田ヶ谷音次郎
- 高橋源次郎
- 阿出川金次郎
- 今村定吉
- 竹内庄次郎

(裏面・二段目)

- 建設委員 田口惣八
- 学務委員 瀨田吉三郎
- 建設委員 宝田金太郎
- 片野安久之助
- 小宮松太郎
- 土屋孫三
- 大家長七
- 学務委員 内田元次郎
- 島田久次郎
- 國井八五郎
- 牧野清三郎
- 吉沢四郎吉

裏面には西新井、興野、本木の方々とおぼしいお名前があり、当時の人たちの近松小学への表彰の気持ちがあがええます。

(足立の学童疎開を語る会 会長)

(1頁から3頁)

■扁額「近松小学」ケヤキ(樺)の一枚板でタテ七八一mm×ハバ一四一〇mmの寸法です。修復の際の調査で、かつて一度、墨を補っていたことが判りました。修復は洗浄を慎重に行ったことで文字がよりはっきり読めるようになりました。

■扁額「梅島小学校」絹地に書かれて額に入っており、寸法はタテ六〇〇mm×ヨコ二〇〇mmです。修理に際して、裏板を外したところ次の通り由来が記されていることも判

明しました。  
(由来書)

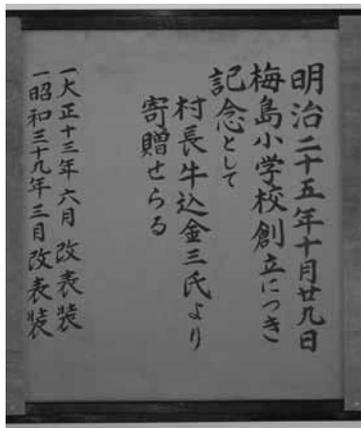
明治二十五年十月廿九日  
梅島小学校創立につき  
記念として

村長牛込金三氏より  
寄贈せらる

一、大正十三年六月 改表装  
一、昭和三十三年三月 改表装

この扁額が南足立郡梅島村の初代村  
長、牛込金三氏から小学校に寄贈さ  
れたこと、さらに今回の修復前に二  
度表装を改めていたことが記され  
ていました。なお「創立」とあるのは  
現在地に校舎が成立した年代を示し  
ています(①参照)。

牛込金三氏は島根の素封家で明治  
二二年に梅島村が成立した時の村長  
でした(在任期間は明治三〇年)。  
本由来書が記されたのは昭和三九  
(二九六四)年に表装を改めたとき  
でしょう。しかしこれまで成立年代  
は不明でしたが、本扁額が明治二五  
(二八九二)年であることが判明し



【梅島小学校】現在の梅島小学校  
は明治初期に梅田五丁目(現在の梅田五丁目)の遍照院を  
仮校舎とした梅栗小学校(うめぐり  
しょうがっこう)を前身としてはじ  
まりました。名前は設立に尽力した  
梅田と栗原に因んでいます。その後  
明治二二年に市制町村制が施行され  
るのに伴い、梅栗小学校が梅島尋常  
小学校となりました。現在の梅島小  
学校の地に校舎が落成し、移転した  
のが明治二五年でした。

こうした書・墨蹟は漢籍や俳諧の  
教養が豊かだった江戸から明治時代  
の人びとが愛好した美術品でした。  
形式は本資料のような扁額の場合  
や、軸装され床の間を飾る場合、さ  
らには屏風装にして披露するもの、  
幟に染めて催事で掲げられる例など  
多彩でした。博物館や区内には幕末  
明治の墨蹟があります。博物館には  
幕末三筆の一人、市河米菴の墨蹟屏  
風(館蔵。足立・鴨下家寄贈)、幕  
末三舟の山岡鉄舟書「自然有余樂」、  
さらに西園寺公望書「愛物」(いず  
れも館蔵。千住・横山家寄贈)、区  
内の寺社の扁額にも多くの名筆があ  
ります。このように広く親しまれた  
書、名筆の鑑賞を通じて歴史を紐解  
くことが出来ます。その代表が両小  
学校の勝海舟の扁額です。

(郷土博物館)

### お知らせ

■六〇〇号記念 おかげさまで本  
紙『足立史談』は六〇〇号を迎えま  
した。昭和四三(一九六八)年三月  
二〇日の創刊以来、あしかけ五〇年  
を数えています。当初のスタイルは  
B5判4頁で、今はA4判となりま  
したが、基本的な編集デザインは変  
わっていません。刷新すべきとの意  
見もありましたが、多くの方から本  
デザインのままが『足立史談』らし  
いとお声をいただいています。ま  
た印刷経費も輪転機で印刷するより  
外注するほうが安いという時代を迎  
え、往時のまま発行しています。

内容面でふりかえると、すでに初  
期の号はいまや歴史資料となってお  
り半世紀の重みを感じます。諸先達  
に負けないよう継続できればと企図  
しています。さて六〇〇号とともに  
足立史談会も創立五〇周年を迎え、  
博物館と共催で左記の講座を開催し  
ます。ぜひご参加下さい。

▼演題 千住生まれの社会経済学者  
「河合栄治郎伝」／講師 松井慎一  
郎氏(聖学院大学准教授。中公新書  
『河合栄次郎』著者)／日時 四月  
二二日午前一〇時〜十二時。／会場  
足立区勤労福祉会館(足立区綾瀬  
一・三四・七)、綾瀬駅西口徒歩三  
分。／参加方法 当日会場へ。無料。

### 惜別—安藤義雄さん

足立史談会の名譽会長で、足立区  
文化財保護審議会委員も務められた  
安藤義雄さんが一月八日に亡くなら  
れました。昭和二(一九二七)年、  
南足立郡千住町のお生まれで九〇歳  
でした。



▼知識と情熱 郷土博物館の調査で  
も幅広い知識がたびたび活かされま  
した。近年でも、平成十四(二〇〇二)  
年、いま村越其榮の代表作となった  
「夏秋草図屏風」が千住河原町稲荷  
神社で見出されたとき安藤氏によつ  
て琳派絵師の作であることをその場  
で指摘され、その後の保存や研究の  
契機となりました。また平成二十  
(二〇〇八)年に花畑千ヶ崎家の解  
体を契機に注目された歌人画家・  
千ヶ崎梯六の師である画家石井柏亭  
は、安藤氏の母校文化学院に在籍時  
の教授でもあり、昨年の「千ヶ崎梯  
六」展の意義を区内に広めることに  
尽力されました。

▼雑学の知恵 その文化学院は与謝  
野晶子・鉄幹夫妻が主導した総合教

「雑学」といつて笑うことなけれ、あらゆることに興味を持ち、なんでも調べて判らうとするのが雑学。一つには生きていくことの面白さの発見、処世術であり、物事の原理、原則を知ることでもあります。領域が広く、あまりにも複雑なので「雑学」と呼び疎かにしていますが、これは大きな誤り。これこそが智慧の結晶。

変化しても氏の編集・執筆は続きます。編集という仕事の足跡を見ても、足立区で『あだち広報』の編集で活躍され、昭和四二(一九六七)年の『新修足立区史』では事務局を、『足立風土記』シリーズ(平成十六・二〇〇四年終了)では編さん委員として主導されました。その間、本誌『足立史談』は創刊号から四〇〇号

まで安藤氏の編集でした。

▼歴史と文学 著作も多彩です。ペ

ンネーム「牧野三郎」名の詩集が「牧

野三郎詩集」(假街社、一九五一年)、『

詩集「声」(研進社、六六年)、『猫

牧野三郎詩集」(涯の会、八九年)、『

猫Part2 牧野三郎詩集」(涯

の会、八九年)があり、個別の論者

では「奥の細道に係わる事項の総括

」(『足立区立郷土博物館紀要』第

十一号、平成三・一九九一年)や、「足

立区及び近隣の巡拝に関する総括」

(『同』第十五号、平成五・一九九三年)

を発表。また足立区郷土史料刊行会

の「史談文庫」シリーズでは足立区

の郷土史と江戸文化を機軸に数多く

上梓されました。

ご紹介した幅広い豊かさから、教

養人という表現がびったりな「安藤

先生」でした。謹んでご冥福をお祈

▼執筆・編集 『足立史談会だより』は安藤氏の手書き文字の印刷物でしたが、七四号(平成六・一九九四年五月)までが手書き、翌号の一ペー

ジのみ手書きで、七六号以降はワー

プロ印刷の版下となりました。

手書きからワープロと執筆手段が

文化遺産調査企画展

谷文晁と二人の文一

1月6日(火)〜5月13日(日)

郷土博物館では新出資料を調査研究する文化遺産調査を行っていま

す。今回は江戸文人画の主導者、谷

文晁と一世文一、二世文一の江戸絵

画や諸資料の展覧会を開催します。

■一世谷文一 谷文晁の女婿で後継

者だった二世文二は文化十五(二八八)

年三月十八日(新暦四月二三日)、

わずか三十二歳(数え年)で天逝し

ます。略歴を記す「谷文一墓石銘」

は下谷組の文人で書家・儒学者の亀

田鵬斎の筆でした。しかし墓所の源

空寺(台東区東上野)は関東大震

災と空襲で被害を受け惜しくも墓石

は失われていました。このたび良質

な拓本が文晁門人の船津文淵家(足

立区江北)から見出され鵬斎の筆致

も明瞭に建立当時をしのばせます。

■二世文一 文晁の孫で万延元

(二八六〇)年の幕府遣米使節の絵

師でもあった二世文一の粉本資料もご

紹介します。二世文二は船津文淵と

親しく交流し足立に幾度も足跡を

遺しています。こうした関係からか

天保二(二八三二)年銘で「文二先生

送帰府」との墨書のある箱から、文



な拓本が文晁門人の船津文淵家(足立区江北)から見出され鵬斎の筆致も明瞭に建立当時をしのばせます。

■二世文一 文晁の孫で万延元(二八六〇)年の幕府遣米使節の絵師でもあった二世文一の粉本資料もご紹介いたします。二世文二は船津文淵と親しく交流し足立に幾度も足跡を遺しています。こうした関係からか天保二(二八三二)年銘で「文二先生送帰府」との墨書のある箱から、文晁、文二の落款が五つ確認されました。一つが蛙を施した木製の「江東文晁之印」です(下写真)。蛙は多産や「無事にかえる」という語呂合わせから吉祥意匠でした。

■谷文晁の新資料 さらに千住酒合戦の摺物の発見を契機に研究交流している国立市教育委員会所蔵の本田家資料から、谷文晁の《山水図》や江戸文人の書画を集めた画帖を招来します。

今年二世谷文二の没後二〇〇年です。これを記念し文晁、一世文一、二世文二という三世代の新資料から、谷家と江戸近郊社会の文化を見ることが目的とした展覧会です。調査報告会ですので、ぜひご来館いただき、多くのご意見・ご指導をお待ちしております。

船津文淵家の「谷文一墓石銘拓本」(右)と、千住仲町の旧家に伝来した「一世谷文一」(白霧降瀑布図)(左)。いずれも区内個人蔵。

(文化遺産調査担当)

(再生紙を使用しています)